

公開シンポジウム

「地方で医史学の花を咲かせよう」-1

三津同盟と村上玄水

川 眞人¹⁾、曾我 俊裕²⁾¹⁾ 社会医療法人 玄真堂 理事長, ²⁾ 中津市歴史博物館 学芸員

2021年11月18日、中津市は幕末に優れた蘭学者・洋学者を輩出した岡山県津山市、島根県津和野町と「蘭学・洋学同盟」を締結した。3市町の首長や教育委員会等の代表が集まり締結式が行われ、博物館・史料館の交流と共同研究の促進、知的観光の振興と食や物産等多分野交流、連携・協力の強化の3事業を推進することとなった。このきっかけになったのは、以下の事実である。津山藩宇田川家2代目宇田川玄真の解剖学書『医範提綱』の日本最初の「銅版解剖図」を参考にして、1819年、村上玄水が九州で史料の整っているものとしては最も早い時期に人体解剖を行い詳細な記録を「解臍記」として残している。私達の調査では、その時の付図として村上玄水が中津藩の絵師に解剖図を描かせたが、『医範提綱』以上のものはないということから4枚だけであった。玄水からそのことを玄真宛てに送った手紙が村上家には残されている。その様なことがきっかけとなり私達と津山市の洋学史料館とは交流を続けてきた。中津市の村上医家は、1640年、中津市諸町に開業した初代・宗伯に始まり現在まで13代続いており、その家は「中津市立村上医家史料館」として活用されている。3000点を超える史料を蔵し、その内容は、九州大学名誉教授・ヴォルフガング・ミヒェル氏らを中心として解読され史料集として出版された。

村上家7代目玄水(1781~1843年)は、中津藩主で蘭学をこよなく愛した奥平昌高の創設した進脩館の初代校長を務めた倉成龍渚に漢学を学び、更に久留米藩の梯隆恭(かけはしりゅうきょう)に3年間、兵法・軍学を学び中津に帰郷した。そこで長崎遊学から帰途の蘭方医、中井厚沢と出会ったことから解剖学に関心を深め医業の道を進む決心をする。その後の生涯の概略を年次で追うと、1811年には中津藩の御典医となり100石を授かる。1819年3月8日、中津の長浜刑場で藩の許可を得て、近在の57名の医師達が見守る中で自らの執刀で人体解剖を行った。1843年、63歳で亡くなり、墓は中津市鷹匠町の東林寺にある。この村上玄水がどの様な人物であったかは、残された史料から、様々な事が推測される。中でも我々が探し求めていた「玄水の肖像画」が近年発見され、蘭学の里・中津にまた貴重な史料が揃った。この肖像画は村上家の仏壇の中から2018年10月館務員が発見し、専門家らの鑑定うけ2019年1月公開された。その画像は、玄水は「隠居した後は弓矢と読書を好んだ」との口伝とも一致し、また、親交のあった日出藩の儒学者・帆足万里が玄水の墓碑に刻んだ文言とも整合する。更に、外題部分の「永仙院様御壽像」が玄水の戒名と一致することなどから専門家も疑う余地なしということになった。この掛け軸は、縦112.8cm横43.3cmで絹本の着色である。画中、刀の柄には村上家の家紋・三階菱があり、本は洋書である。玄水は解剖にいたるまで様々な学問(兵学、天文学、地理学、哲学等)に挑戦している。玄水の「草稿」には、冬至と夏至の仕組みや、地球の公転と太陽の関係が書かれている。人体解剖にいたる迄には、天地(自然)の仕組みを明らかにしたいという思いがあった様である。『解臍記』の冒頭に「解臍文」という玄水の解剖にいたる動機と哲学が記述されている。解剖医の根本は、天地の創生を理解するために天の創るものの偉大さを認識することである。と述べている。どの様な変調が体のどの部分にあるのかを認識し、これをきちんと診断してその実情を察知すれば、どの薬を使ってどの治術を行えばよいかという事を知ろうとする蘭法が優れていることを理解すべきである。解剖は

人を活かす術であり、同時に刑死体の冥福を祈る事が出来る理由でもある。と述べている。当然ながら、医師である玄水自ら執刀し解剖して、その解剖図を中津藩の画員片山東籬とその助手佐久間玉江に写生させ『解剖図説』を作らせた。残念ながら、この図説の色彩図は横山健堂によって中津から持ち出され行方不明であったため、私が捜したところ写本が東京都中央図書館等にあることが判明し、私がコピーを入手し展示している。改めて玄水が広範囲な学問を勉強し退路を断って人体解剖を決断したことを示す見事な記録が残っている。新たに近年発見された肖像画、更にそれらの諸々が「三津同盟」へと繋がったことを述べた。